

昭和63年度

## 図書館活動のネットワーク化に関する研究

～地区館の基本的サービスと役割について～

川崎市総合教育センター社会教育研究会議

## 図書館活動のネットワーク化に関する研究

### ～地区館の基本的サービスと役割について～

社会教育研究会議

瀬尾正文<sup>1</sup> 内藤スミ子<sup>2</sup> 野村充<sup>3</sup> 山下正武<sup>4</sup> 京利幸<sup>5</sup> 古橋富美雄<sup>6</sup>

#### 要 約

図書館が市民の一番身近な施設として、暮らしの中に根づくためにはどうすればよいのかを  
実証的に検討し、今後の展望を得ることが本研究の目的である。

まず、川崎市の現状を1行政区をモデルとして分析を加えた。その結果、図書館サービスが  
市民の暮らしのなかに十分はいておらず、多くの市民とは無縁の関係にあることが調査結果  
からも明確になった。つぎにその事実をふまえ、モデルとした行政区の計画をたて、さらにこ  
れからの川崎市に求められる図書館システムの構築をおこなった。このことは、長期展望に立  
つビジョンと具体的な図書館計画を実施に移す努力なしには、市民の信頼を得る図書館活動を  
発展させる余地が見えないという事実を明らかにしたといえる。今後は質的にも高めていくこ  
とを含め、さまざまな機関との連携が重要な課題となっている。

キーワード：図書館サービス、図書館計画、図書館活動、図書館システム、図書館資料

#### 目 次

はじめに	2. 調査結果からみた利用者の 求める図書館の立地	121
I 主題設定の理由	3. 高津区の分館の展望	122
II 研究の目標	4. 求められる図書館システム	126
III 研究の内容と方法	V 研究のまとめと今後の課題	129
1. 図書館サービスとは	おわりに	
2. 川崎市の現状	参考文献・指導助言者	130
3. 地区館としての高津図書館の現状		
4. 高津区の図書館設置計画の設定		
5. 高津区の特長		
IV 研究の実際と考察		
1. 調査の設計と結果の概要		

<sup>1</sup>中原図書館主任（司書）

<sup>2</sup>麻生図書館主査（司書）

<sup>3</sup>高津図書館（司書）

<sup>4</sup>多摩図書館主任（司書）

<sup>5</sup>高津市民館社会教育振興係長（社会教育主事）

<sup>6</sup>総合教育センター主査（社会教育主事）

## はじめに

図書館は過去から現在そして未来へと人類の記憶を整理し、保存し提供していく役割を担い、その活動をおこなっている。そして人々はその記憶を引き出し、日々の生活に潤いを持たせ、役立たせている。

いま川崎市では6つの地区館が活動しているが、市民の増大する要求に十分応じられないのが現状であり、さらに市民の学習要求は多様化し、高度化・個性化していると同時に、身近な所にその場を求めている。これらのいろいろな要求を満たしていくには、身近な場に図書館をはじめとする市民文化施設を設置することが望ましい。また、このことが地域文化やコミュニティを発展させていく原動力となる。ここに図書館の公的役割が存在するのであり、このことを視点に置いて本チームは研究をスタートさせた。

### I 主題設定の理由

現在、川崎市には行政区が7区あり、図書館は川崎区を除いた各行政区に1館の地区館がおかれている。しかし、図書館が身近な場として利用できる地域が限られており、多くの住民がその場を保障されていない。また資料面からみると各館ごとに独自なため、その制約も受けている。このことは昭和61年の社会教育委員会議答申「川崎市における市民館および図書館の運営の在り方について」の中でも、各行政区バラバラではなく、綿密な地域計画に基づいた全市的総合システムとして構想されるべきであると指摘している。また同時に住民の生活に役立つためには住民の身近なところに分館の設置ということも指摘している。

このような背景をうけ、図書館が住民の身近で利用できるようにするための図書館サービス網をどう作っていくか、また指摘された全市的総合システムを作っていく中で地区館がどのような役割をおこなうのかを見ていくこととした。

### II 研究の目標

1. 住民が身近なところで利用できる図書館サービス網の策定
2. 図書館サービス・システムの中での地区館の位置と役割の考察

### III 研究の内容・方法

#### 1. 図書館サービスとは

図書館サービスとは、図書館が利用者に提供する種々の便宜または、図書館の事業というようにとらえられ、通常、図書館資料（注1参照）の貸出を中心に、閲覧、参考業務（レファレンスサービス）、集会活動などがある。特に、公共図書館は市民の知る権利、学習権などを保障する社会的な機関として対象の地域社会の事情や、市民の要求を把握し、内容的にも多岐にわたるきめ細かなサービスが望まれている。この図書館サービスをすべての市民に等しくおこなうために、複数の図書館・サービスポイントが共同活動を進める組織を図書館システムという。図書館サービスが市民の間にどれくらい浸透しているかという指標としては、図書館の登録率（注2参照）、貸出冊数な

どがある。

注1：図書館において収集の対象としているもので①図書、②逐次刊行物、③パンフレット、リーフレット、④文書、記録、⑤絵画的資料（絵葉書、版画など）、⑥マイクロ写真、⑦視覚資料（スライド、映画フィルム）、⑧聴覚資料（カセットテープなど）⑨その他ビデオテープ、点字本などがある。

注2：登録者数の奉仕対象人口全体に占める割合をさす。

## 2. 川崎市の現状

川崎市の図書館サービスは、各行政区におかれた地区館6館（幸・中原・高津・宮前・多摩・麻生）と、自動車図書館3台によっておこなわれている。昭和61年度における実績は、表-1のとおりで、個人貸出冊数は207万冊である。

表-1 昭和61年度活動実績

川崎市の人口	蔵書冊数	貸出冊数	登録者数	登録率	市民一人の蔵書数
1,109,538人	743,312冊	2,075,750冊	148,263人	13.4%	0.6冊

この実績の背景には、昭和55年に幸図書館、昭和60年には宮前・麻生図書館が開館されたことで急速に伸びたことがあげられる。このように空白地域に図書館ができることにより、利用が急速に伸びていくことは市民の図書館に対する期待が大きいことを示している。しかし、川崎市の図書館サービスを市民の文化的要求を充たすという点から見ると次のような問題点が指摘できる。

- ①川崎市の人口の18%をしめる川崎区に市立図書館がない。
- ②行政区に1館の地区館しかないため、図書館サービスを受けられない人が多い。
- ③年間の資料購入費が少ないため、図書館の蔵書への魅力を失わせている。
- ④職員数の少なさは職員の専門性を失わせ、図書館サービスへの意欲的な力を喪失させている。

また、このような現状の問題点から次のような点が課題として設定することができる。

- ①川崎市のどこに住んでいる人でも、図書館を利用できるように各地区館を基本に図書館サービスの網をはりめぐらさなければならない。そのためにも川崎区に地区館を建設することが必要である。
- ②市民の図書館への要求が多様化しているとともに、個性化し、高度化しているので図書館資料全体を質量ともに強化していく必要がある。
- ③地区館を活性化するために、蔵書全体を新鮮で魅力あるものにする必要がある。また、市民のくらしに密着する図書館サービスをより拡充していくために、図書館資料の情報ネットワークの形成が求められており、そのためにも全館を結ぶオン・ラインをおこなう必要がある。
- ④市民により効果的な図書館サービスを提供するには、専門職員を充実することが欠かせない。
- ⑤市民の図書館資料をはじめとする多様な要求に応えるには、市内のさまざまな情報を包括するネットワーク作りが必要であり、多くの関連施設・市民団体との密接な連携が求められる。
- ⑥全市の図書館の核となる中央図書館の早期建設が望まれる。

このように川崎市の現状を分析するとさまざまな課題が山積していると言える。そこで、これらの

課題のなかで、「市内のどこに住んでいる人でも図書館を利用できる」ということを可能にしながら、図書館利用者を増やしていくことを第一の課題として研究を進めていくことにした。研究の方法としては、一行政区の地区館のサービスに対し量的な面から現状を調査・分析し、課題に対する具体策を出していくことにする。また、その上で図書館システム全体を視野に入れて地区館の役割について考察を加えていくことにする。そこで、この研究を進めていくにあたって実証をおこなっていくモデルとして、川崎市の7行政区のうち高津区を選び、その地区館としての高津図書館を選定した。理由としては、第1に図書館活動の歴史があり、サービス実績が分析できること、第2に調査活動をおこなう上で比較的データが取りやすいという点である。また高津図書館が、この研究期間中に新しい場所に新館ができ、移動するという点で、その後の経過についての資料との比較検討ができるということも理由のひとつである。

### 3. 地区館としての高津図書館の現状

#### (1)高津図書館の推移

高津図書館は、昭和4年に橘樹郡高津町の町内有志が発起人となり、町民の寄付により高津尋常小学校内に高津町立図書館として発足した。昭和12年に川崎市第4次合併にともない市に移管され川崎市立高津図書館となる。その後、昭和24年米国神奈川軍政部図書館が市に移管されたのでこれを引き継ぎ、昭和40年には建物を新築し開館した。そして、昭和63年に文教大学附属小学校跡地に新築された図書館に移転した。

#### (2)利用実績

高津図書館の過去の実績を見て行くと、登録率が7%前後、貸出冊数20万冊前後である。表-2は過去6年間の実績である。この表で見ると、昭和59年を境に登録者・貸出冊数とも下降していることがわかる。これは昭和60年7月に分区にともなう宮前図書館が開館したことが大きな原因と考えられる。

表-2 高津図書館活動実績表

	61年度	60年度	59年度	58年度	57年度	56年度
登録者数	10,830	11,864	14,432	13,549	13,583	10,663
貸出冊数	198,031	230,616	257,163	245,491	232,613	204,379
年間増加冊数	16,650	8,367	9,342	10,807	11,062	10,449

#### (3)登録者の分布と地理的条件

高津図書館を利用している人が高津区内のどこに住んでいるかを見るために一定の範囲に分けて登録率(表-3)をみると、図書館の周辺地域の利用が多く、距離が離れるに従って利用が少なくなることが明瞭となっている。各地域名の後の数値は昭和60年度実績である。

表-3 昭和60年度登録率

1キロ圏内	久本 (13.11%)・溝口 (12.70%)・二子 (9.78%)
2キロ圏内	坂戸 (9.56%)・諏訪 (9.51%)・久地 (8.44%)・上作延 (7.99%) 瀬田 (7.34%)・北見方 (7.24%)・下作延 (6.67%)・末長 (5.17%) 宇奈根 (3.37%)・新作 (2.96%)
3キロ圏内	下野毛 (5.48%)・向ヶ丘 (4.97%)・梶ヶ谷 (4.52%) 千年新町 (1.38%)・千年 (0.79%)
4キロ圏内	野川 (0.66%)・子母口 (0.51%)・子母口富士見台 (一)
5キロ圏内	久末 (0.50%)・蟹ヶ谷 (1.07%)・明津 (0.72%)

また、これらを具体的に地図上に示したのが図-1の登録分布図である。この図からもわかるように高津図書館は、高津区の経済・交通の中心である武蔵溝の口駅より多摩川寄りにあって、区のはずれに位置しており、さらに、市内の他の区の図書館と異なり、高津図書館のみに特徴的なこととして、他の行政機関、特に区役所・市民館とかなり離れた位置にあるという点も指摘できる。これは何かのついでに図書館に立ち寄り可能性が少ないということである。

また一方、交通機関との関係から見ると、高津区内には南武線、田園都市線、バスといった交通機関があるが、南武線の利用を考えた場合、武蔵溝の口駅より歩かなければならず、やや不便と言える。田園都市線の場合は高津駅が最寄りの駅となるため、来館するには便利である。バスについては高津を経由しない路線については武蔵溝の口駅周辺から歩かねばならずこれも不便と言える。特に橋地区・上作延方面からのバスは南武線を歩いて越えねばならず、不便といえる。南武線を隔てた地域の登録率が低いのもこの様な点に原因があると考えられる。

以上のような点から見ると、高津図書館は地理的条件としては決して恵まれた位置にあるとはいえない。

そこでこれらの点から地区館としての高津図書館が今後地域住民に均等な図書館サービスを展開していくためには、次のようなことが考えられる。

① 地区館としての図書館サービス計画を立案していく。

第1に、地域住民が日常的に図書館が利用できる条件を整備していくために、図書館の配置計画を立てる。第2に、地域住民が求める情報を適切に提供していくための資料収集計画を立てる。

② 図書館サービスの指標を作成していく。

図書館サービス計画を具体的なものとするために、登録率・貸出冊数などに計画的な目標値を持たせる。また資料の新鮮度を維持するための年間増加冊数にも数値を持たせる。

③ 広報活動を展開していく。

図書館のあることを知らない人も多いと考えられるので、身近な図書館利用の案内を始め、いろいろな事業などをおし図書館活動を地域に浸透させる。



き上げること为目标として図書館設置計画を作成した場合、施設配置は、本館1館と、図書館から最も遠い住民で直線距離1.5 Km以内で利用できるようにすると、最も少くても分館3館が必要となる。またこれらの図書館の受け持ちサービス範囲は次のように仮定する。

- ①本館（現高津図書館）…………… 溝口、二子、瀬田、諏訪、下野毛、坂戸、久本、久地、宇奈根
- ②梶ヶ谷分館 ……………… 梶ヶ谷1-6丁目、向ヶ丘、上作延、下作延
- ③千年分館 ……………… 千年、千年新町、新作1-6丁目、末長
- ④久末分館 ……………… 久末、野川、子母口、子母口富士見台、明津、蟹ヶ谷

これらの地区の各図書館の資料整備などを「公立図書館の望ましい基準（案）」の基準数値で計算すると表-4のようになる。

表-4 仮説としての図書館設置案

	人 口	蔵書冊数	増加冊数	登 録 率	登録者数	貸出冊数
基 準 値		1人1.5冊	人口の1%	人口の15%		1人2冊
本 館	72,000	108,000	9,000	15	10,800	144,000
梶ヶ谷分館	19,000	28,500	2,400	15	2,900	38,000
千 年 分 館	35,000	52,500	4,400	15	5,200	70,000
久 末 分 館	30,000	45,000	3,750	15	4,500	60,000
高津区全体	156,000	234,000	19,550	15	23,400	312,000

## 5. 高津区の特性

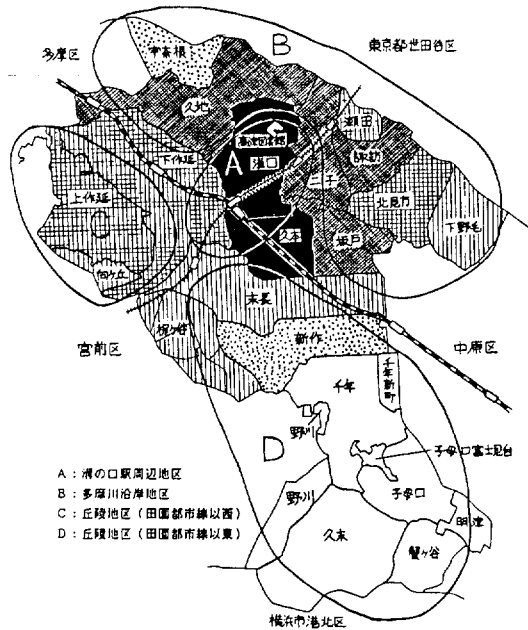
※面積 17.10 Km<sup>2</sup> ※人口 160,270人 ※人口密度 9,373人（S. 63. 8. 1 現在）

### (1)区の特性と概況

川崎市北西部の拠点として発展してきた高津区は、歴史的には大山街道沿いに二子の渡し場の船泊りを中心に溝口から二子地区にかけての宿場として発展してきた地域と、多摩丘陵にあって貴重な遺跡や由緒ある史蹟の多い地域とから成り立っている。昭和40年代前半に、この丘陵地帯に県・市の中高層住宅が大量に進出してきた。また、平地においても、以前からの民間の小さなアパートなども多く密集して建てられていたが、ここ数年は大きなマンションがつつぎと建設されている。

この高津区を現在の時点で見ると、南武線と田園都市線の溝の口駅を中心とした商業地区（図2-A地区）、南武線と多摩川にはさまれた住宅と工業などの混在地区（図2-B地区）、そして雑木林や竹林などのどかな田園風景がまだ残されている丘陵部に広がる住宅地区（図2-C・D地区）の3つに大きく性格を分けることができる。また将来的には、高津区は内陸部拠点地区としての機能を備えるために、さらに都市基盤などの整備が急がれている。具体的には、溝の口駅周辺地区の再開発を進め、それにとまう通路・道路の整備を図ることである。さらに、多摩川沿岸地区には、全市的な都市型工業ゾーンの核として住宅と工業の調和を目指した整備をおこない、また現在新しい研究開発機能の拠点として「神奈川サイエンスパーク（KSP）」の建設が促進されている。一方丘陵地区は生活環境条件の向上を図るために、老朽化した市営住宅の質的改善をおこない、自然空間の保全に努めながら市民施設の整備が進められることになっている。

図-2 地区の特性



## (2)高津区の計画の視点

市民のひとりひとりがどのような地域に生活するにせよ、文化的に豊かに生存していくために、少なくとも地域に根づいて生活し、発達し続けるための学習・文化・スポーツなどの最低条件の社会教育の機会が享受されるべきであろう。その意味において、高津区は昭和62・63年の「川崎市市民意識実態調査」の結果から見ると必ずしも好条件にあるとはいえないことがわかる。それによると近隣に寄り合う場や機会が少なく、大人どうしの面識が浅く、従って地域社会とのかかわりをもととしない個別の家族単位の生活を営んでいるという傾向が強く、また、そのことが社会的次元で生活をとらえる機会を少なくしており、住民自治の阻害の要因になっていると推測される。しかしながら、高津区は自治会・町内会活動を始めスポーツなどのサークル活動も盛んにおこなわれている。したがって、これらをきっかけとして学習・文化をも包括したトータルのコミュニティ活動が育っていくことが望まれる。また自らの地域活動を活発にしていくためにもイニシアティブをとるような人が多く育っていくことが望まれる。現にそうした人々がいる地域では、既成の地域社会の慣習に強い刺激を与え、そこに生活する人々の共感の輪を広げていく例をいくつも見ることができる。

生涯にわたって学ぶということは、市民ひとりひとりの人間形成をトータルとしてとらえることができ、「生」への意欲に支えられた自己学習であり、生活と学習のネットワーク形成にほかならない。また、日常的にも結びつき、精神的にも地域での生活を高めようとする市民生活の学習活動としてとらえるならば、今後、人と人とのつながりとぬくもりを創りだす市民施設と都市基盤の構造的な配置と整備を図ることが重要となってくる。

## IV 研究の実際と考察

本研究をすすめるにあたっては、(1)高津区内の図書館利用者のアンケートを実施、(2)アンケート調査の分析、(3)考察の三段階をおいた。

### 1. 調査の設計と概要～「高津区内の図書館利用者の利用状況についての調査」

#### (1)調査の目的

地区館の役割を見ていくため、高津区内の図書館利用者に対してアンケート調査を行い、利用者の実態と生活動線など、図書館設置計画設定に必要な資料を得るとともに、図書館サービスの状況をつかまえる。

#### (2)調査の設計

##### ○調査対象

高津区内の図書館利用者を原則的には高津図書館の利用者から抽出し、一部の地域について中原図書館の利用者からも無作為に抽出した。なお、調査対象の基準日は昭和63年5月31日とした。

##### ○調査方法

全体を4地域（溝口地区・梶ヶ谷地区・千年地区・久末地区）に分け、それぞれ100人とし、溝口地区を除いて配付・回収とも郵送により実施し、溝口地区については高津図書館内において利用者に直接回答してもらった。

○調査期間 昭和63年5月12日～昭和63年5月31日

○回収結果

- ・ サンプル数 400 (A)
- ・ 回収された数 242
- ・ 有効数 242 (B)
- ・ 有効回収率  $(B) \div (A) \times 100 = 60.5\%$

#### (3)調査の概要

ここにあげたアンケートの調査結果は、調査対象としてあらかじめ分けた各地域と、調査のそれぞれの質問項目とをクロス集計したものの一部である。数字は各地区ごとの回答者数を100%としてそれぞれしめる割合をだした。

##### ①「あなたが主に利用する図書館はどこですか」

表-5

全体としてみれば高津図書館を利用している人が81.4%、中原図書館が11.6%、宮前図書館が5.4%となっている。しかし、地区別にみると、久末地区では半数が中原図書館を利用している。

	全 体	溝口地区	梶ヶ谷地区	千年地区	久末地区
高津図書館	81.4	97.2	90.0	83.3	41.3
幸 図書館	0.8	—	—	—	4.3
中原図書館	11.6	—	—	9.3	50.0
宮前図書館	5.4	1.4	8.6	7.4	4.3
多摩図書館	0.4	—	1.4	—	—
そ の 他	0.4	1.4	—	—	—

②「あなたがその図書館を利用する理由は何ですか」 表-6

全体では交通の便がよいという回答が一番多く、歩いて行けると合わせると回答の半数を占めている。地区別に見ると、溝口地区の人は35.4%が歩いて行けると回答しているのに対し、他の地区では、何らかの交通手段をつかって図書館に来ている。

	全 体	溝口地区	梶ヶ谷地区	千年地区	久末地区
歩いていける	21.5	35.4	20.9	11.1	5.0
交通の便がよい	29.2	16.7	35.5	28.9	48.3
建物が明るい	18.1	23.6	16.4	21.1	3.3
本がそろっている	15.8	13.9	14.5	17.8	20.0
職員が親切	7.9	6.9	7.3	10.0	8.3
そ の 他	7.4	3.5	5.5	11.1	15.0

③「あなたはその図書館にどこから行きますか」 表-7

全体ではほとんどの人が自宅から直接図書館に行くという回答をしている。ただ、地区別に見た場合、久末地区で21.7%の人が通勤・通学の途中で図書館を利用している。

	全 体	溝口地区	梶ヶ谷地区	千年地区	久末地区
自宅から	89.3	90.3	94.3	90.7	78.3
通勤・通学の途中	9.9	8.3	4.3	9.3	21.7
そ の 他	0.8	1.4	1.4	—	—

④「あなたはその図書館へどのような方法で行きますか」 表-8

全体的には自転車の利用率が高く、徒歩と自転車で来館する人が6割を占めている。地区別に見ると、溝口地区では93%の人が徒歩か自転車で来館し、梶ヶ谷・千年地区では自転車が多く、久末地区ではバス利用が37%と高くなっている。

	全 体	溝口地区	梶ヶ谷地区	千年地区	久末地区
徒歩のみ	19.5	38.0	17.1	7.4	8.7
自転車	41.9	54.9	40.0	44.4	21.7
バス	9.5	—	4.3	5.6	37.0
電車	11.6	4.2	14.3	29.1	4.3
その他	17.4	2.8	24.3	18.5	28.3

⑤「その場合どのくらいの時間がかかりますか」 表-9

全体的には10分以内・20分以内で来館する人が80%を占めている。地区別では、溝口地区が10分以内で、他の地区は20分以内で来館する人が最も多い。しかし、久末地区では20分以上かかる人が半数以上もいる。

	全 体	溝口地区	梶ヶ谷地区	千年地区	久末地区
10分以内	35.7	76.4	25.7	15.1	10.9
20分以内	41.1	20.8	52.9	56.6	37.0
30分以内	16.6	1.4	15.7	22.6	34.8
40分以内	4.5	1.4	2.9	3.8	13.0
40分以上	2.1	—	2.9	1.9	4.3

⑥「図書館への時間は徒歩でどれくらいならば適当だと思いますか」 表-10

各地区、全体とも徒歩で10分ないしは20分以内が85~90%を占めている。

	全 体	溝口地区	梶ヶ谷地区	千年地区	久末地区
10分以内	36.0	41.7	30.0	38.9	32.6
20分以内	49.6	47.2	54.3	42.6	54.3
30分以内	11.2	11.1	10.0	14.8	8.7
40分以内	3.3	—	5.7	3.7	4.3

⑦「あなたは主に何曜日に図書館を利用しますか」 表-11

全体的には、土・日の利用者が50%前後を占めている。地区別に見ると、溝口が各曜日が平均した利用率になっているのに対し、他の地区では土・日の利用率が高い。

	全 体	溝口地区	梶ヶ谷地区	千年地区	久末地区
火 曜 日	12.4	18.1	12.9	9.3	6.5
水 曜 日	9.9	8.3	10.0	13.0	8.7
木 曜 日	8.7	8.3	5.7	9.3	13.0
金 曜 日	8.7	16.7	8.6	1.9	4.3
土 曜 日	20.7	16.7	21.4	24.1	21.7
日 曜 日	28.1	16.7	32.9	40.1	23.9
そ の 他	11.6	15.3	8.6	1.9	21.7

⑧「あなたのお仕事をお聞かせください」

表-12

全体では常勤で勤めている人が最も多く、主婦がそれに続いて多い。これを地区別で見ると、溝口地区では、主婦が最も高い率で利用しているが、他の地区では、常勤で勤めている人の来館率が高い。特に、千年・久末地区は常勤・パート・学生が全体の3分の2を占めている。

	全 体	溝口地区	梶ヶ谷地区	千年地区	久末地区
自家営業	7.9	11.1	10.0	3.7	4.3
常勤で勤務	34.3	20.8	37.1	51.9	30.4
パートで勤務	9.5	6.9	7.1	13.0	13.0
学 生	11.2	15.3	7.1	1.9	21.7
主 婦	29.8	38.9	31.4	22.2	21.7
無 職	7.4	6.9	7.1	7.4	6.7

⑨「あなたが電車に乗るとき利用される最寄り駅は次のどれですか」 表-13

全体では武蔵新城・武蔵中原・武蔵小杉駅、溝の口（JRおよび田園都市線）、二子新地・高津駅がほぼ同率で並び、梶が谷・鷺沼駅がそれに続

	全 体	溝口地区	梶ヶ谷地区	千年地区	久末地区
武蔵新城・武蔵小杉駅	24.4	6.9	—	55.6	52.2
津田山・久地駅	6.6	—	22.9	—	—
二子新地・高津駅	22.3	75.0	—	—	—
梶ヶ谷・鷺沼駅	18.6	—	35.7	31.5	6.5
溝の口駅	24.4	18.1	41.4	13.0	21.7
そ の 他	3.7	—	—	—	19.6

いている。このことは、高津区民の利用駅が拡散していることから多様な生活動線を持っていることがわかる。これを地区別で見ると、千年・久末地区では50%以上の人が武蔵新城から武蔵小杉の南武線の駅を利用している。また、梶ヶ谷地区・千年地区では田園都市線の梶が谷・鷺沼駅を利用している人が3分の1づついる。溝口地区では、二子新地・高津駅の利用者が全体の75%を占めている。

## 2. 調査結果からみた利用者の求める図書館の立地

図書館の立地を考えるために、実際の利用日とどこから来館しているか、そして来館の方法・所要時間の検討が必要である。また、現状で10%以上の登録率を持つ溝口地区と他の地区について、先の点から比較することが利用者の求める図書館の立地を探るうえで有力な手がかりとなる。

### (1)利用日について

溝口地区では各曜日とも平均した利用が行われているのに対し、他の地区では土・日に50～60%の利用がなされている。これは溝口地区は主婦の利用が多く、他の地区では常勤者・パート・学

生の利用が多いということと関連して考えられる。常勤者にとっては平日に図書館に行くことは難しく、また溝口地区以外の地区では主婦層であっても買い物などの途中で図書館に立ち寄ることが困難であることを示している。身近な所に図書館があれば、主婦にとっては平日の時間内に、常勤者・パート・学生にとっては休みの日にもっと気軽に利用できるようになるであろう。

#### (2)どこから来館するかについて

ほとんどの人が自宅から来館している。溝口地区では主婦、他の地区では常勤者と土・日の利用率が高いことから自宅から直接来館という回答が多くなっている。常勤者にとっては多少現在の図書館が近くなったとしても平日の利用が増えるとは考えられない。従って自宅近くに図書館ができれば少なくとも休みの日にはさらに利用しやすくなり、特に主婦にとっては大いに利用できると考えられる。

#### (3)来館方法について

溝口地区では徒歩が38%、自転車が54.9%で両方を合わせると90%をこえている。梶ヶ谷・千年地区では自転車40%であるが、徒歩での来館はぐっと減って電車・バスの利用が高くなっている。久末地区を見ると、自転車の利用も21.7%と低くなり、何らかの交通手段を使用せざるをえない状況である。

#### (4)所要時間と望ましい時間について

来館するための所要時間は、現状では溝口で10分、他の地区では10分以上20分以内と回答している人が最も多い。また徒歩で何分までなら適当かという質問では10分以内 20分以内という回答を合わせると各地区とも80~90%となる。この数字は何らかの交通手段を使っているとしても現状の所要時間と望ましい時間とに大きなずれはない。しかし、見方を変えていえば望ましい時間以上に時間がかかる人は図書館に来ていないということである。

以上述べた4点から考えると、おおよその図書館の位置が現われてくる。すなわち、平日には主婦層、土・日には常勤者・パート・学生など平日に来館が困難な人が図書館に来るためには、徒歩か自転車で来館でき、徒歩20分以内の距離に図書館があることが望まれている。また、実際の距離としては、徒歩で20分は約1.5kmであるが、必ずしも直線で来られるわけでないので、徒歩20分という距離は直線距離で1kmの範囲と考えたほうがよい。そして商店街など日常の生活圏に近い位置にあることが重要である。

### 3. 高津区の分館展望

これまでの調査結果から見ると、図書館の分館の位置については半径1km圏内にあることが利用者の最も多くが望んでいることであった。この点から考え高津区では仮説としてあげた3館以上の分館が必要となる。そこでまずこの3館をどの位置におけば効果的なのかを考えることにし、仮説段階で分けた梶ヶ谷地区・千年地区・久末地区の实地調査を実施した。また、各地区の分析と分館の位置の設定に関しては、①生活動線の向き（人々が通勤・通学、または買い物などで使う日常的な動き）、②地形的なもの（平坦部か丘陵部かなど人々が動きやすい方向）、③人口の集中している場所に留意して行なうことにした。

## ○地区の特性と分館設置の位置

### ①梶ヶ谷地区

この地区は丘陵を開発したところで坂も多いところである。商店街の中心は梶ヶ谷駅付近に集中しており、買物動線が比較的駅方向に向いている。また通勤・通学のための動線も駅方向である。しかし、上作延・下作延は溝の口に向かうバス路線にしたがって通勤・通学の動線は溝の口方向に向かっている。人口が集中しているのは上作延の県営住宅、マンションや戸建ての立て込んでいる梶ヶ谷駅周辺と梶ヶ谷1～4丁目などである。現在、宮前図書館で運行している自動車図書館のポイントが梶ヶ谷2丁目の公園脇にある。ここは梶ヶ谷の住宅街の中心であり、また、近くには西梶ヶ谷小学校もあり、広く住民に利用されている。そこでこの付近に分館が設置されると自動車図書館の利用者だけでなく、比較的梶ヶ谷駅にも近いことから広範囲の住民の利用が促進される適当な位置ではないかと考えられる。しかし、この地区に含まれる上作延の住民にとっては距離が遠く、利用が難しい。

### ②千年地区

この地区は平坦な地形で、比較的早くから開けていたところである。徒歩で南武線の武蔵新城駅あるいはバス路線で溝の口、武蔵中原、武蔵小杉へと比較的容易に出られる地域である。商店街はそれぞれの地域で小さなまとまりをみせているが、集中するのは武蔵新城駅周辺である。通勤・通学・買い物など生活動線も大部分が武蔵新城駅と溝の口の2方向に向いている。人口の集中しているのは末長の市営住宅付近、新作4・5・6丁目、千年新町、千年の武蔵新城駅よりの部分である。この地区の中心は高津区役所橋出張所付近であるが、この場所に設置すると武蔵新城駅に向かう人の生活動線と相反することになる。そこで末長の市営住宅付近が溝の口と武蔵新城駅の両方向に近く、また末長小学校なども近くにあることから適当な位置ではないかと考えられる。ただこの地点は大きな工場も近くあって、すべての方向に開けているわけではないという欠点もある。新作6丁目付近に設置し千年方面の住民の生活動線に近づけてはという考えもあるが、溝の口方向へ向かう人からは逆方向となり不便となる。いずれにしてもこの地区は高津区でも人口の一番多い地区でもあり、分館を設置し、広い駐輪場などを用意することがより広範囲で利用されることになるであろう。

### ③久末地区

この地区は市道（尻手・黒川線）に沿った平坦な部分と横浜市と境を接する丘陵地に分れ、人口の集中している場所も子母口の中心と丘陵に点在する市営・県営住宅やマンションなどの集合住宅群のあるところである。またバスが重要な交通機関となっており、行く先も武蔵小杉、溝の口をはじめ、田園都市線鷺沼駅、東横線元住吉・日吉駅などいろいろである。従って通勤・通学・買い物など生活動線が複雑となっている。そのためこの地区の中心となる点を設定することが困難なところでもある。そこで比較的人口が集中している子母口の消防署付近、あるいは丘陵地にある蟹ヶ谷と久末の市営住宅との中間あたりに設置することが望ましいと考えられるが、どちらにしてもこの地区全体をカバーすることは困難である。従ってこの分館は徒歩で来館するには地形的に不便が予想されるので、ある程度の駐車設備を確保しておくことが住民の利用を促進するカギになる。

以上述べてきた各地区の特性を表したのが図-3であり、また各地区に分館を作ると高津区などのくらいの範囲がカバーできるかということを表したのが図-4である。図-4の作成に関しては「公共図書館の地域計画」(栗原嘉一郎ほか著 日本図書館協会)の来館者密度比という方法によった。

図-4を見てもわかるように、高津区のはほぼ大部分の地域は図書館サービスの枠に組み込まれることになるが、これだけではカバーできない地域も出てくる。上作延、下野毛、久地などの地域である。この地域をカバーしていくには、例えば上作延の地域は宮前区と一部重なる地点に分館を、また下野毛の地域は中原区と重なる部分に設置していくことも考えられる。このように地区館は第一義的には自己の持つ行政区レベルでのサービス拠点を考えることが必要である。しかし、次の段階としては他の行政区と重なる部分でのサービス拠点を考える必要があるといえる。

図-3 商店街・交通網と駅へ向かう人の流れ

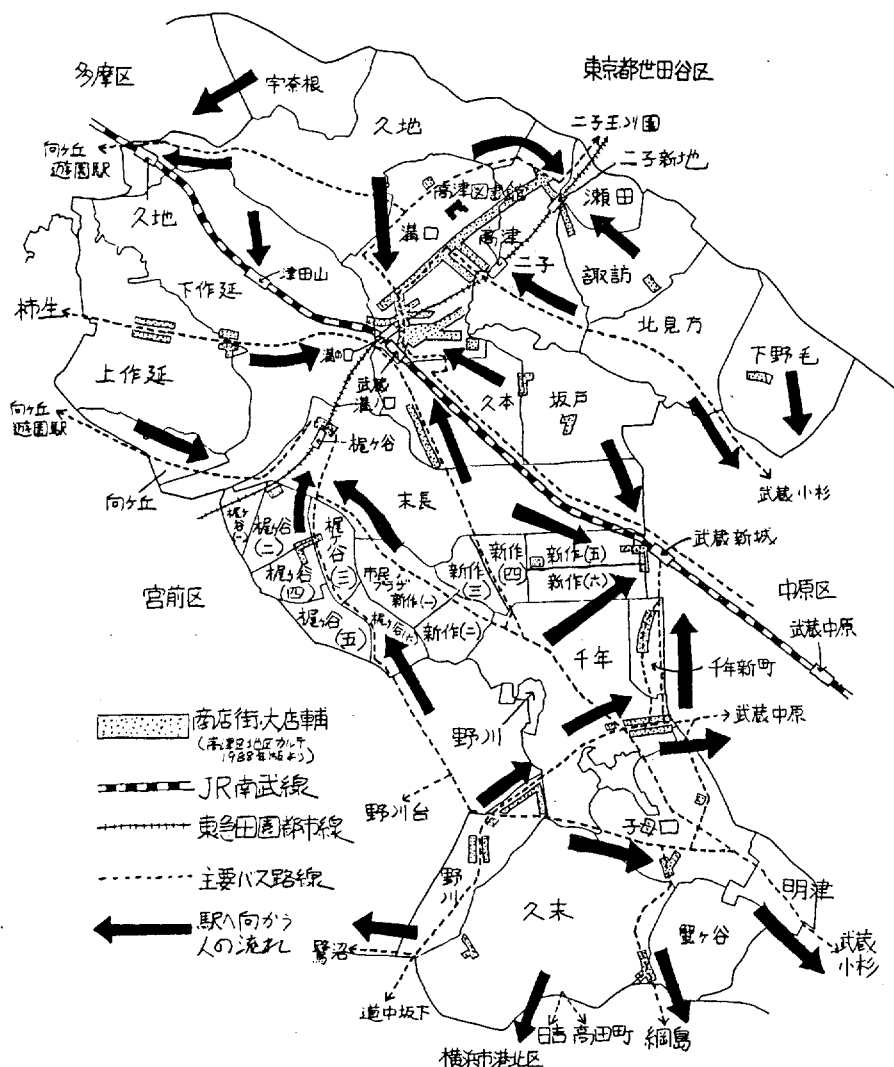
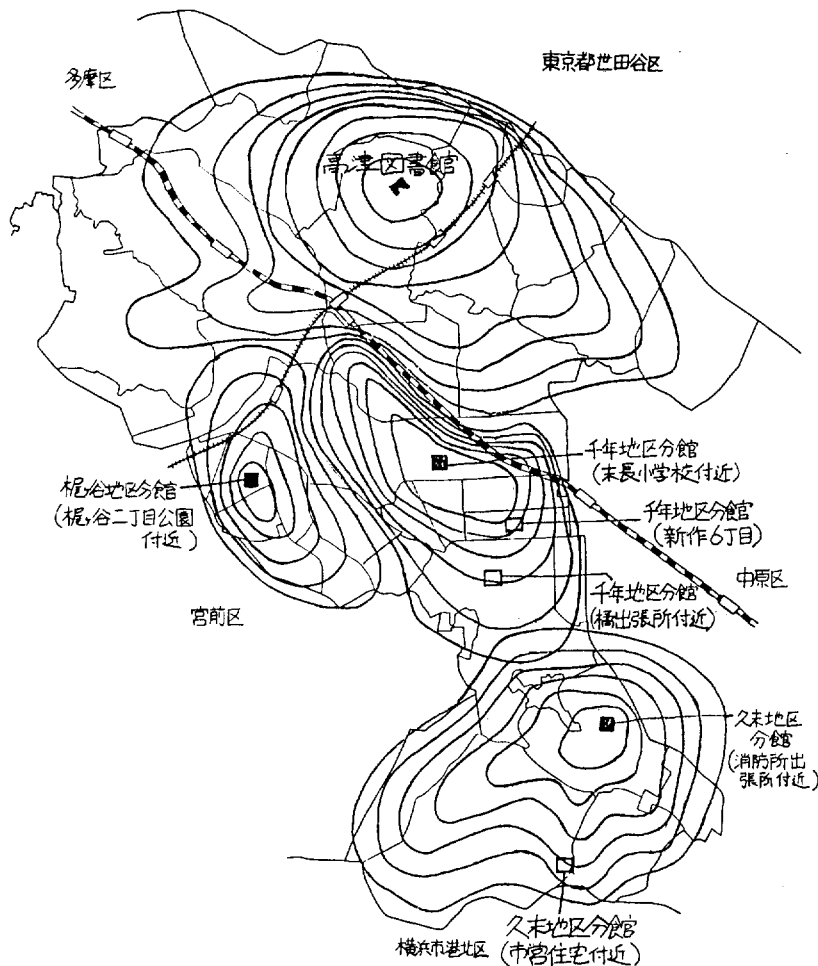


図-4 来館者密度比 (3分館完成時)



これまで高津区の図書館の登録をはじめいくつかの問題点を指摘してきたが、調査の結果などをふまえると高津区民の多くが図書館を気軽に利用できる場所には住んでおらず、生活動線も複雑であることがわかった。また地形的にも平坦部と丘陵地が混在しており、自転車を使っても利用することが困難であったこともわかった。特に活動範囲が限られている子どもの利用を極端に妨げていると言っても過言ではない。そこで地区館はまず自己の行政区民の生活動線と生活実態をつかみ、サービスの拠点を増やし、すべての区民が均等に図書館サービスが受けられるための方策をこうじなければならぬ。その上で全市レベルでそれぞれ関連していく地区館と連携していくことが求められているといえる。

#### 4. 求められる図書館システム

これまでの調査および分析の結果から、高津区民にとって日常生活の一部として図書館を利用できる環境としては、現在の地区館に加え、少なくとも最低3館の分館が必要であることが結論づけられた。この結論を土台として、全市民が均等に図書館サービスを受けられるための全市的な図書館システムについて検討すると次のように推論できる。各行政区の中心館として、また直接サービスの中核としての機能を持つ地区館が7館、市民の日常生活に密接なサービスをおこなう分館が高津区の実証的検証から各行政区に3～4館が必要となる。さらにこれらの要となり、全市的な図書館システムを有機的に結びつけていく中央館1館が必要となる。そして、これらを考えていく前提条件としては、①市民のだれでもが20分程度で図書館を利用することができる、②川崎市の地形的条件や市民意識の相違など各行政区の特性を活動に反映できるようにする、③機能の中心を1館に集中させるのではなく各地区館にある程度分散させることを考慮した。

次に中央館、地区館、分館そして自動車図書館を含めて構成された川崎市の図書館システムをどのように機能させたならば、市民の幅広い情報要求に応えることができるかということについてみたい。

まず、それぞれがどのようなサービス機能を持つかについてみると、次のような役割が考えられる。

##### (1)分館

分館は受け持ちサービス圏内の住民に対し、日常生活の中から生ずるさまざまな情報要求に直接応える図書館として、貸出に重点をおく運営をおこなう。また、図書館資料の予約・読書相談などにも力点を置いた活動をおこなう。そして次のような内容を持つ。

- ①原則として印刷された図書館資料の収集と提供をおこなう。
- ②貸出の拡大および図書館利用を促進するための集会・行事活動をおこなう。
- ③蔵書は3万冊以上（奉仕人口1館当り2～4万人、住民1人当り1冊）とし、比較的行動範囲の狭い幼児・児童・主婦、そして高齢者を利用層の中心としてとらえ、全蔵書を開架とし、内容も実用書・入門書・文学書・児童書を中心とする。なお、図書のリターン率を考慮して、おおむね出版されてから5年以内のものを中心とする。

##### (2)地区館

地区館は直接サービスの中核として幅広い市民の情報要求に応えるとともに、行政区の中心館としてその区の図書館サービスの推進を積極的におこなう。そして次のような内容を持つ。

- ①印刷された図書館資料だけでなく、視聴覚資料・データベースなど幅広く資料を収集する。
- ②分館をはじめとするサービスポイントからの図書館資料の予約・レファレンスサービスなどの援助をおこなう。
- ③比較的行動範囲の広い成人・学生などの利用も多いことが考えられるので、蔵書の内容も概論的資料・研究書・専門書・参考図書資料・郷土行政資料を中心とする。なお、これらの蔵書はおおむね出版されてから10年以内のものを中心とする。また、各地区館は、独自の専門領域を持ち、資料の収集およびサービス内容にも特色を持つ。
- ④受け持ち行政区内の図書館で収集する図書館資料の購入から整理までの一括処理と管理を行なう。

- ⑤市外の図書館および各種機関との協力窓口とする。
- ⑥自動車図書館や団体貸出など館外奉仕活動の運営拠点とする。
- ⑦行政区内の関係する郷土・行政資料を収集し、保存する。

### (3)中央館

中央館は地区館・分館など市域にはりめぐらされた図書館システムが有機的な活動をしていくための要であり、図書館資料をはじめとする情報を収集・提供し、保存する中心的な活動をする。そして次のような内容を持つのではないかと考えられる。

- ①コンピュータシステムの管理および情報管理を行なう。
- ②図書館資料選択および図書館運営に関する連絡・調整を行なう。
- ③図書館の利用の促進と普及をはかるための全館の広報および宣伝を行なう。
- ④市外の図書館および各種機関との協力窓口とする。
- ⑤川崎市民の多様な情報要求に応える資料群を保持するため、地区館・分館において、相対的に利用度が低下したが、資料的には価値が認められるものを集中的に保存する。その内容はおおむね発行されて10年以上のものを相当量に保存できる機能を持つ必要がある。
- ⑥川崎市に關係する郷土・行政資料を網羅的に収集し、保存する。

次にこれらの図書館システム相互が有機的に結びついたときの機能について、図書館のシステム内部の問題と市民に対するサービスとに分けて考察してみたい。

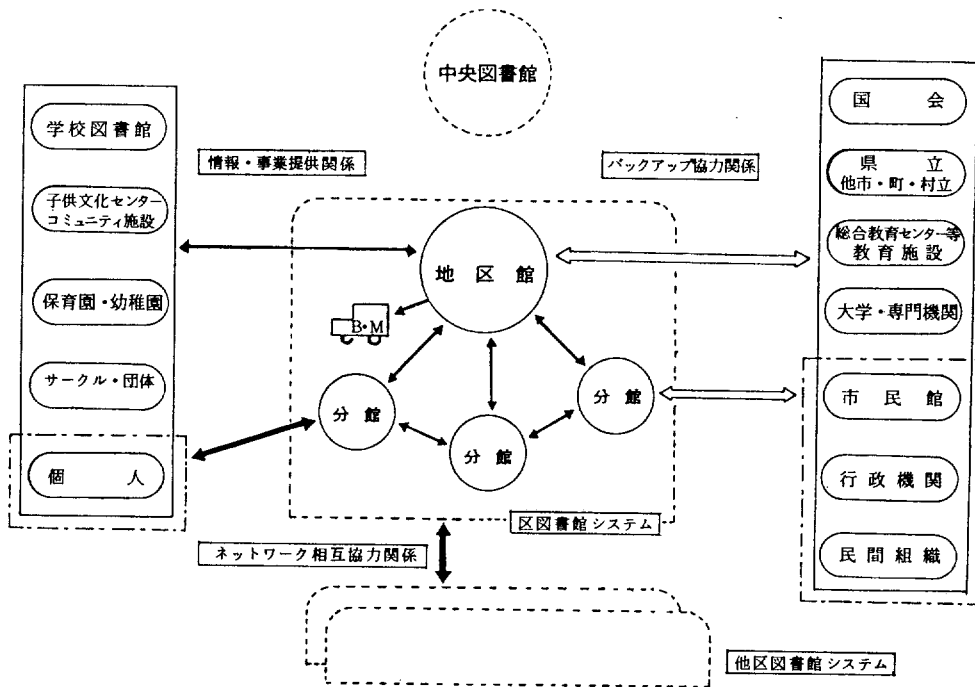
まず図書館のシステム内部では市民に提供していく資料が地区館を中心に収集されていく。また、郷土資料など各地域と密接な関係にあるものは分館をはじめそれぞれが関係する最も小さい単位で情報が収集され、資料が入手され、さらに地区館にまとめられていく、中央館は別にこれら各行政区の地区館を中心としたシステムを支え、援助していただくだけの資料を収集していく。反対に利用が少なくなった資料は分館から地区館へ、そしてさらに地区館から中央館へとそれぞれの選択過程を経て集められ、さらに精選された形で川崎市の図書館資料群としてまとめられていく。川崎市にない資料については県立をはじめ県内の図書館、そして国立国会図書館へと資料の相互貸借のシステムを経て地区館あるいは中央館を窓口として求められていく。市民から要求されるさまざまな情報に関して、図書館システムで持っていないものに関し、各種の機関（総合教育センター・市民館・行政機関など）との横の連携を持つ中で照会され、あるいは提供を受け、さらに市民に提供していくことになる。こうして提供していく資料に関しては、ひとつの流れとして、ネットワーク化されることになる。

このような流れが作られるなかで、図書館から市民に対し提供されるサービスは、基本的には個人に対しておこなわれることが原則となっている。しかし、市民の活動にはさまざまな形態があり、例えばグループを作って読書活動・読書普及活動の目的で図書館の資料が必要であったり、あるいは学習活動のために図書館の資料を利用したり、また、市民が身近に利用する機関などでも同様な活動をおこなうために資料が要求されることもある。これらに対するサービスは各地区館がそれぞれの行政区のなかで資料の提供をおこなっていく。また一方、障害を持った人々に対して行なわれるサービスとして、対面朗読奉仕という形をとるものは、直接住居の近くの図書館へ行って受ける

ことが適切であり、また、来られない人には自宅への郵送サービスという形で利用することもできる。この活動の核となるのが地区館であるが、研修をはじめ、地区館ではできない他の障害者サービスを中央館が行うことが妥当と考えられる。これらとは別に学校図書館との連携が大きな課題としてある。児童・生徒の人間形成において、豊かな読書経験の重要性はこれまでもさまざまな場で論じられてきた。生涯にわたる図書館利用の基礎を作るためにも学校図書館との連携により、資料の案内をはじめとして、いろいろな機会をとらえ情報を提供し、また、情報を得ることが今後の図書館の発展にとっては重要である。また地域の活動に関していえば、図書館は市民の文化的な生活を営み続けるために必要な情報を一番身近な場で提供し、また自主的活動が活発化するためにも市民館をはじめとする関連施設などと連携し、事業をはじめとする学習活動の援助を積極的に行なう必要もある。そのためにも各分館の活動を援助し、行政区のサービスを高める計画を具体的に立て、実施していく地区館の責任は重いとわざるをえない。これに対し中央館は各地区館相互の計画あるいは事業などの調整、また図書館サービス全体への援助的な機能が求められる。例えば、専門的な内容に関するレファレンス業務をはじめ、各種の図書館資料の発行、あるいは専門機関との連携に基づく情報の収集など、地区館レベルでできない領域をおこなう。こうして川崎市の図書館システムは、各行政区の地区館と分館などを基本として運営され、中央館が全面的に援助をおこなっていく。これらのシステムの関係を示したのが図-5である。

最後にこれら図書館システムの活動は資料だけでなく、大切なことは十分な図書館経験と、自らを高めていく努力をしていく司書が数多く配置されることである。それ無しにはどんな図書館システムが立派にできたとしても、真に市民の信頼をえる図書館とはなり得ないであろう。

図-5 図書館サービス提供システム関連図



## V 研究のまとめと今後の課題

生涯学習と高度情報化の進展は、図書館のイメージを大きく変えてきている。図書館への要望も質的に高度に専門化し、また量的にも増加し、多様化している。もはや単独館だけのこれまでの方法では、市民のニーズに十分応えるだけのサービスができなくなっている。そこで、これまでの図書館サービスの広がり方を問い直し、時代にふさわしくこれからの社会に十分対応していける図書館づくりを目指して2年間の研究を行ってきた。一定の仮説を立て、高津区で具体的に検証した。その結果、川崎市のこれまでの図書館サービスを改善していく方向性を示唆できるものとなったと確信している。ここでこの2年間の研究の経緯にふれ、今後の課題を整理し、まとめにかえたい。なお、時間的制約もあり、残された課題については次の機会に検討されることを期待したい。

### 1. 研究の経緯

1年次は、①主題設定とその背景の分析、②川崎市の図書館の現状分析、③モデルとしての高津区の分析、④課題の整理などをおこなった。文献・資料・他都市との比較などから川崎市の図書館の貧困さがさらけ出された。私達の研究は牛歩の進み方であったが、討議を繰り返しながら、事実関係をつきとめることができた。川崎市の図書館は「2001かわさきプラン」などの計画により推進されてはいるが、具体的なビジョンに欠け、地域サービス計画や指標は無きに等しく、仮説に用いた「公立図書館の望ましい基準(案)」にも満たないほど遅れている。この遅れが、市民の文化的・知的生活や自治力の形成、社会性の培われていかないことにも大きく影響している。2年次は、①検証のための調査の実施と分析、②求められる図書館システム、③研究報告書の作成に向けて取り組んできた。調査の結果、高津区における区民の生活動線は多様化しており、それをふまえた分館を設置していくことが必要であることがわかった。またこのことは他の区でも同様であり、あらためて川崎市の図書館システムを構築し、それぞれがどのような役割を担うのかを明確にしていく必要性がわかった。

### 2. 今後の残された課題

主題に迫るためには、既存の図書館を最大限有効に活用し、有機的な連携を積極的に進め、より迅速に対応していけるシステムを形成し、市民のだれでもが気軽に利用できる分館をそれぞれの地域性に合わせ設置していく以外に方法がない。そこで次のような課題が残されている。

①「公立図書館の望ましい基準(案)」に追いつく努力をする… 指標を作り、計画的に拡大していくことが望まれる。また、日常生活圏内に図書館のある町づくりを目指す。

②サービス体制の充実と拡大を図る… 市民の多種多様な要求に応えていくために、可能なかぎり広く豊かな情報を迅速に提供していくためのネットワークづくりが急がれる。

③積極的利用の促進を図る… 情報の提供だけでなく、市民の学習活動を援助する一環として、読書活動に関する事業を積極的に行ない、市民の日常生活の中に読書の喜びと楽しさを作り出す。

④ボランティア活動で活性化を図る… 市民のかけがえのない共有財産である図書館にしていくなために、市民の自発的な活動を援助していく。

⑤市民の声を生かす場をつくる… 「社会教育行政の市民参加の在り方に関する研究」報告書でも

指摘されているように、「図書館協議会」を制度的にも確立していくとききている。

⑥司書及び職員の確保 … 図書館の質をいかに高めていくかをはじめ、ソフト面については手をつけないまま終わってしまったが、早急に取り組むべきである。

## おわりに

2年間にわたり、5人のメンバー全員が社会教育の現場で多くの仕事を抱えながら、月1回の定例会を中心としてさまざまな討議をおこなってきた。この間にも研究のモデルとした地区館「高津図書館」は移転して新しく開館し、川崎市全体の図書館を結ぶオンライン化計画も軌道にのりはじめている。また、目を転じれば、文部省の社会教育審議会で「新しい時代（生涯学習・高度情報化の時代）に向けての公共図書館の在り方について」の中間報告も出された。図書館は今や時代の要請を正面から受けている。このような中であって当研究チームも主題に迫るためにいろいろな文献を読み、またさまざまなデータに当たった。試行錯誤の繰り返しも多かった。いまこのような報告をまとめるにあたり、少しでも川崎市の図書館活動が、市民と結び、共に育つ活動ができれば幸いである。

### • 参考文献

「公立図書館の望ましい基準（案）と基準（案）ができるまで」（図書館雑誌）

日本図書館協会，1967

アメリカ公共図書館協会編「公共図書館システムの最低基準」日本図書館協会，1971

日本図書館協会編「市民の図書館」増補版，1976

栗原嘉一郎ほか著「公共図書館の地域計画」日本図書館協会，1977

全国公共図書館協議会編「図書館全国計画のための基礎資料集」1～3集，1979～81

朝倉雅彦著「図書館システム化と保存機能」（図書館雑誌）日本図書館協会，1981

津田良成編「図書館・情報学概論」勁草書房，1983

「世田谷区の図書館計画に関する提言」世田谷区教育委員会，1984

森耕一編「図書館サービスの測定と評価」日本図書館協会，1985

「2001 川崎プラン第2次中期計画」川崎市，1986

「川崎市市民意識実態調査 昭和62年度」川崎市市民局，1987

「川崎市地区カルテ」川崎市，1988

「新しい時代（生涯学習・高度情報化の時代）に向けての公共図書館の在り方について

— 中間報告 —」（図書館雑誌）日本図書館協会，1988

### • 指導助言者

大正大学教授（専門員） 湯上二郎先生 川崎市総合教育センター主幹 宇田川雄三

川崎市多摩市民館館長 神崎節生